
カティの畑－短編－

相野谷 華苑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カテイの畑―短編―

【Nコード】

N9485R

【作者名】

相野谷 華苑

【あらすじ】

カテイの畑。番外短編

後悔―天帝テロ―（前書き）

カティの畑。天帝テロの思いです
またまたへタレテロ爆発なので御注意を

後悔―天帝テロ―

「地上に帰りたい」

その言葉を何度聞いて、何度打ち消してきただろう
その後の君の悲しそうな表情に何度後悔してきただろう
なのに僕は君を離す事は出来ない

「全て破壊こわしてしまおうか？」

僕から君を奪う全ての物に嫉妬し、恐怖する
そんな僕の弱い心を君の瞳は全てを見抜いていた。

自分勝手な気持ちを見透かされたくなくて、君の瞳を見れなくな
た。

君から視線を外されて傷付く資格なんてないのに傷付いた

―― どれほどの後悔を経験すれば幸せに出来るんだろう？

ただ君の笑顔を求めていただけなのに、いつの間にか君のすべてを
求めていた。その顔に浮かぶ笑顔すら今では造られた物なのに…
造り出された偽の世界は歪んで壊れていく。
そのカウントダウンが始まっているのに気付かない振りをした

「天妃様が地上に降りられました」

壊れて白くなつた世界

また一から造り直さなくては…何度でも僕は君の世界を造ろう

今度は少し大きな籠にしよう
羽ばたかないで僕の鳥
さあ今から迎えに行くよ

後悔―天帝テロ―（後書き）

うわあゝ妄想。

テロ恐すぎる…

まあでもあくまでテロの頭の中の妄想であって、結局テロはカティに甘いので地上での生活を許してしまうんですからねゝ

好敵手ー炎帝アデライドー(前書き)

アデリーとカティの出会ってからの話です

好敵手―炎帝アデライド―

最初の感じは小さな鴉

不安に苛さいなまれながらいつも周りを警戒していた。

はつきり言つて眉目秀麗な陛下の横にこれつてどうよ？が私の意見。それに人間だったのがハッキリ言つて気に入らない

俗物と言われようが、何て言われようが神族のプライドがあった陛下にいくら直談判しても聞き入れるどころか、笑つて言われた

「私以外がカティの魅力を知らなくていいよ」

あの子に陛下を惹き付ける何があるの？

いつもおどおどと陛下の後ろに隠れて滅多に表に出てこない癖に
どどん私の中のカティの評価は下がる一方だった

*

そんな生活が一年ぐらい続いた時。

執務を終えて王宮内の私室向かおうとした時、渡り廊下でカティの姿を見かけた

正確に言えばカティ一人じゃなくて、長老達の娘複数と一緒にだった

――あちら、もしかして虐め？

全くカティの事なんて心配していないし助ける気も毛頭ないけど、
王宮内で天帝妃をどうにかするなど問題になりかねないから一応気配を悟られないように尾行した

案の定彼女は王宮の人気の無い所に連れていかれる

「人の分際でいつまで天界にいるつもり？」

「陛下の寵愛を受けているなんて勘違いしない方がいいわよ。あん

たなんて単なる意趣返しなんだから」

「地上に親近者が生きてる内に帰りなさいよ」

とても上位貴族のお嬢様とは思えない言葉の羅列に眉間の皺が深くなる

それは彼女達があたしの侍女として王宮勤めを認められてた子達だったから

あたしは綺麗で可愛い物が好き。こんな品位の欠片もない事をされては自分の周りに居て貰う事は辞めてもらおうと思う

それにしても、ずっと俯いたままなんて…ほんとにつまらない子

カティは彼女達の言葉に一言も発する事なく黙ったまま

虐めていた彼女達もイライラしてきたのか、ある少女が叫びながらカティに対して手を挙げた

「むかつくっ!!!何とか言いなさいよ!!!」

その瞬間、どうしてかわからないけど寒気に襲われた

そしてその行動を止めないと大変な事になるとあたしの直感が言ってる

「その辺にしといたら」

「……アデライド様っ!!!」「」「」

ぞくぞくと身体を走る感覚を抑えて、何事もないような振りして話し掛けた

―― ばれて青ざめるぐらいならやるなっつうの

「王宮内で天妃に手を出すなんて、さっさと行きなさい」

「もっ申し訳ありません。どうしても人ごときが王宮にいるのが我

慢ならなくて…」

「いいわ。不問にするから行きなさい」

「はいっ」

慌てて去っていく侍女達を見送ってから振り返った先には天妃
こうして二人きりで体面するのは初めてだった

「あなたもさっさと後宮に帰りなさい」

いつまで経っても上げない顔

人間のくせにあたしの事ナメてんの？この女

「み…み…見つけたあああ！！！！」

「は？」

「これよっ！これっ！薬本の中でこの草だけがまだ見つからなかつたのよう！ああここで出会えたのは奇跡だわ」

目の前の天妃はどこから出したのか、虫眼鏡でじつと足下の草を見ている

「あなたねえ…」

「この葉の形状的には回復草よね…」などぶつぶつ言っている
拳げ句の果てにその草を根ごと摘むと、こちらを向きもせず立ち去ろうとしている

帰りなさいって言ったけど、これってちょっと違ってしょうがっ！
！！

「待ちなさいよっ…」

「は？」

「は？」はこっちの台詞よっ！！

「天妃様がこのような人目につかないような所に連れてこられて、侍女から嫌がらせを受けて居ると言う事は大問題ですが？いかが対応致しますか？」

普通少しでも天妃としてのプライドがあるのなら、彼女達を権力を使って処分するだろうし、そうなれば家臣の反感を買う事は間違いない。愚妃として世にその名を残せばいい嫌味を含んだ『天妃様』という言葉にも全く動じず、めんどくさそうな視線をあたしに向けてくる
今まで見た事なかった大きな黒い瞳に真っ直ぐ見つめられて、自分のどこかでドクンツと音がなった。

「…どうでもいいです」

「は？」

「あっ！貴方にお任せします」

「え？」

「よろしく願います」

天妃はそういうと頭を下げて深くお辞儀をした。

絶句。こんな姫…見た事がない。

——この子は弱くなんかない。人だからといって劣等感も感じてない。

「な…なっ」

「それじゃ」

それだけ言うと彼女はすたすたと歩き去った

残されたあたしは茫然とするしかなくて…

臣下であるあたしに対しても平気で頭を下げるし、誰もが恐れる炎帝のあたしに…あんな口の聞き方するなんて…

「ふ…ふふっ…ふはははははっ！！」

わくわくした。何だか新しいおもちゃを与えて貰ったようなそんな高揚感

彼女の事を知りたい。

そして私が彼女にベタボレになる日もそう遠くなかった

…いつの間にか陛下がライバルになってたなんて…ね

好敵手ー炎帝アデライドー（後書き）

最初はアデリーはカティの好きじゃなかったんですけど…

いつのまにか黒い目に囚われて興味から溺愛に変わっていきます

ちなみにカティのアデリーの初印象は「胸でかつ!!」でした

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9485r/>

カティの畑－短編－

2011年3月27日09時34分発行